

2026年度フィールドスタディ型 政策協働プログラム

岩手県大船渡市

被災地から都市へのフィードバック
～未来に発生する大災害に備え、あなた自身は
どう行動するのか～

活動地域

岩手県大船渡市三陸町

(綾里地区・越喜来地区など海業・森林再生の拠点)

岩手県大船渡市三陸町



典型的なリアス海岸。深い入江の穏やかな海に恵まれた三陸町（2001年に大船渡市と合併）。豊かな資源を背景に1000軒以上の漁業者が漁を営んでいます。（この地域だけで秋田県全域より多くの漁師がいます）

冬暖かく、夏涼しく、自然に恵まれた地域ですが、過去130年で4回被災という世界でも稀に見る津波常襲地帯です。

例えば三陸町綾里（りょうり）では1896年の明治三陸津波では当時の人口2251人のうち死亡・行方不明は1269人。38.2メートルという日本最大の津波遡上高を記録しました。

こうした度重なる被害にも関わらず、何度も何度も復興し、そのたびに高台移転や防災意識の向上により、「次の津波」の被害を減少させてきました。

という意味では、日本でも最も強靱なレジリエンスをもつ地域の一つといってよいでしょう。



大船渡市山林火災



2025年2月に発生した大船渡山林火災。出火からわずか2時間で600ヘクタールが消失しました。（この時点で平成以降最大の山林火災）

火災発生から1時間20分で2114人の避難者が発生し、最終的に市人口の15%が避難者に。

日本の歴史上類例のない大規模なWUI（Wild Urban Interface）火災であり、激甚災害に指定されました。

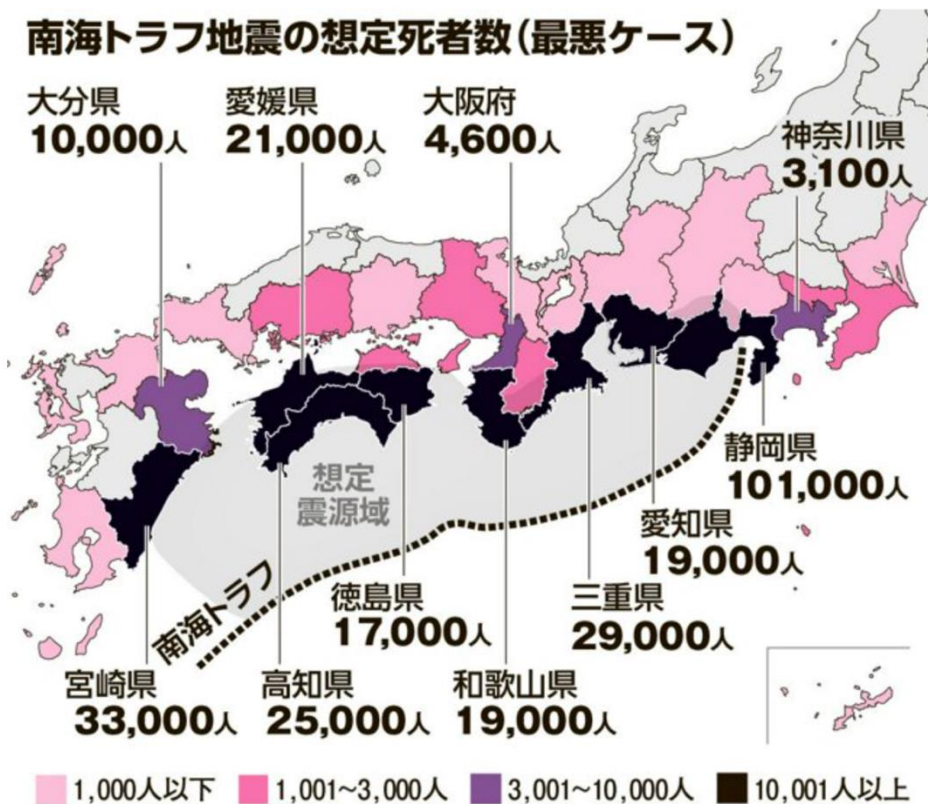
被害額は102億円以上。地域では多くの方が今も仮設住宅で暮らし、漁業・林業中心に被害は甚大です。

一方で、東日本大震災などの経験や教訓をもとに、発災直後から住民自身が主体的に動き、自助・共助による活動を開始。スピーディな避難活動を行い、被害を抑えました。

そして復興への動き出しでも、住民主体の活動は重要な役割を果たしています。

いつか必ずくる南海トラフ地震や首都直下地震

南海トラフ地震の想定死者数(最悪ケース)



南海トラフ地震の想定死者数(最悪ケース)

大船渡市を舞台にしたフィールドスタディのテーマは、「被災地から都市へのフィードバック」。想定死者数29万人といわれる南海トラフ地震など、今後の発生が確実視される大災害をみすえて、参加者自身に、自分自身の防災、そして都市民の意識・行動の変容を考えてもらいたいと思います。

東日本大震災以降、大船渡が培ってきた、レジリエンス、自助・共助のネットワーク、防災ノウハウといったものを学ぶことで、多くのヒントが見つかると思い、このテーマを設定しました。

少しでも3.11の教訓を新たな世代に継承できればと考えています。

大船渡でおきたような、大規模な地震や津波、火災があなたの生活空間でおきたとき、あなたや家族はどう生きのびるのか？

このフィールドスタディが、あなたや家族の命を救うことになるかもしれません。

首都直下地震の都内被害想定

	見直し後の想定	平成24年の想定
最大震度	震度7	震度7
死者	6148人	9641人
負傷者	9万3435人	14万7611人
建物被害	19万4431棟	30万4300棟
避難者	299万3713人	338万5489人
帰宅困難者	452万5949人	516万6126人
耐震化率	92%	81%

大船渡移住・定住相談センター「トモヅナ」

このフィールドスタディで中心的役割を果たすのは、大船渡市移住定住センター「トモヅナ」で理事をつとめる、中野圭と阿部正幸、2人の地域プレイヤーです。ともに東日本大震災以来15年間、様々な復興団体や起業を通じて、地域課題の解決に取り組んできました。ともに、漁業と深い関わりを持ち、日々海とむきあって仕事をしています。

中野 圭

NPO高田暮舎 大船渡担当理事



中野圭

岩手県大船渡市三陸町越喜来（おきらい）出身の漁師（16代目）で、早稲田大学卒業後、東日本大震災を機にUターン。NPO法人wiz、NPO法人いわて連携復興センターなど、様々な復興団体の理事を務める一方、漁師としても水産品のブランド化や六次化に取り組んできた。



中野圭 紹介記事

阿部正幸

NPO高田暮舎 大船渡担当理事



阿部正幸

北海道出身。関西でのシステム会社勤務後、東日本大震災でのボランティアがきっかけで岩手県に移住。NPOとして創業し日本初のIPOを達成した株式会社雨風太陽の創業に参画。2019年に大船渡市綾里地区に移住、2024年に株式会社山海畑を創業。漁業、農業、林業すべてで、現場取材や課題解決に取り組んでいる。



阿部正幸プロフィール

フィールドスタディでの体験・学び



大船渡でのフィールドスタディは、現地での体験とヒアリングを重視します。参加者には漁業や林業など、地域のなりわいを体験してもらい、「人と自然の関係」「コミュニティ」という地域の根幹を体感してもらいます。

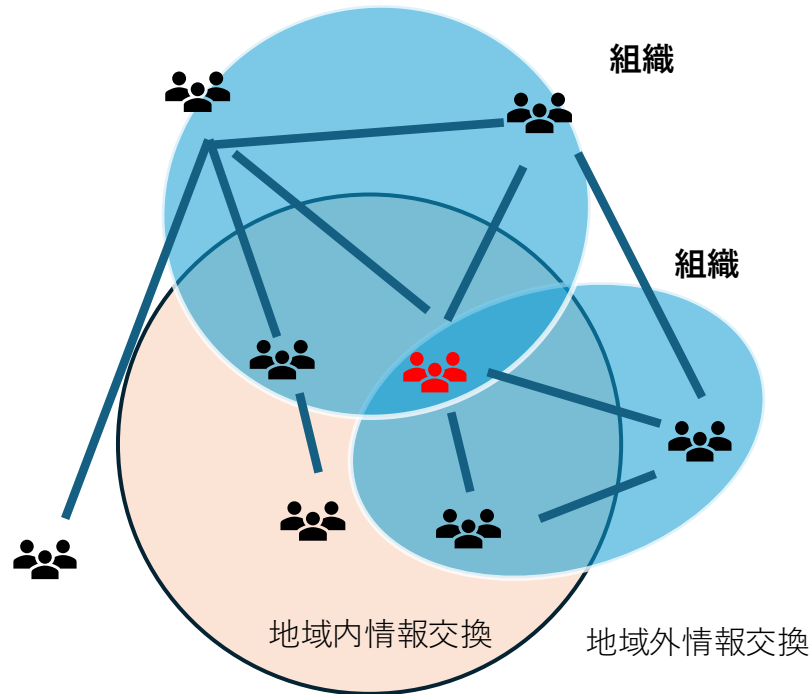
三陸はいま、水温の急上昇という巨大な変化にさらされています。漁業、農業、林業、どれを考えるときにも気候変動の影響は免れません。地域を学ぶことは地球を学ぶことでもある、それを実感してもらいたいと思います。



そして大船渡市三陸町の住民は、ほとんど全員が東日本大震災を生き抜いたサバイバーでもあります。数々の災害や危機を乗り越えてきた体験談をヒアリングしましょう。

加えて行政職員やNPOなど、復興において「共助」「公助」のハブとなった人材へのヒアリングも行います。

関係人口を通じて、都市と地方、双方の課題を考える



**地域内/外、組織間の情報とネットワークを
接続するノードが、災害時には
重要な役割をはたす**

東日本大震災後、岩手県の人口は急減しました。しかし復興ボランティアなどを通じて、多くの都市民が岩手の関係人口となり、それまで地域にはなかった人材・ノウハウ・ネットワークが地域に供給され、地域課題解決につながっています。

去年の山林火災でも、関係人口は復興の大きなキーワードになりました。

災害時には、都市と地方をまたいだネットワークが重要で、結節点（ノード）となる人物が非常に重要な役割を果たします。

こうした人材を多く抱えているのが大船渡です。マルチステークホルダー、マルチセクターが重視され始めた今、大船渡で学ぶことは地方課題解決の学びになるだけでなく、都市課題解決のヒントにもなるはずです。

関係人口という意味では、首都圏に住む復興活動経験者や大船渡ファンにも、ぜひヒアリングをしてもらいたいと思います。